

まちづくり ひろしま

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

第61号 (令和4年9月15日)

読者数：674名(募集中)

メール：hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp

HP：<https://machizukurihiroshima.web.fc2.com/index.htm>

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

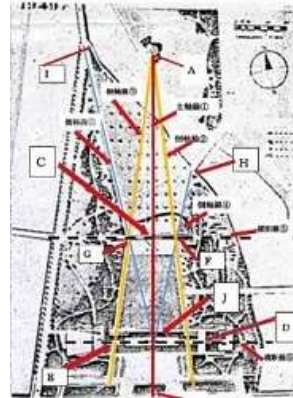
配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

ウクライナに平和を！平和を我らに！



○第8回 2代目平和の鐘祈念式



○広島平和記念公園計画の軸線



○図書館、勝手に検討フェス



○峠三吉詩碑と被爆遺構展示施設

目次

- 巻頭言：日本は法治国家なのか……………ガリバープロダクツ代表 通谷 章
- ひろしまのまちづくりの動き
 - ・広島市、中央図書館等の移転の検討業務発注
 - ・第8回 響け！2代目平和の鐘祈念式 (実施報告)
- 広島の復興の軌跡・人物編：丹下健三 その4……………編集委員 石丸紀興
- Hihukusho ラジオ報告：ゲスト 前岡智之 (中国セントラルコンサルタント代表)
- ほっとコーナー：息子はダウン症ダンサー……………福祉事業所勤務 佐藤千恵
- 「時代を語り建築を語る会」の報告：語り人 宮崎園子 (フリーランス記者)
- 「どうする『わたしたちの』図書館、勝手に検討フェスティバル」報告 (概要)
- 特別寄稿：『原爆詩集』70年、広島「平和」の質を問う……………池田正彦
- 読者からの投稿：広島都市全体で平和記念都市を！……………読者 保森博美
- 編集後記：編集委員 前岡智之

□ 巻頭言

日本は法治国家なのか

ガリバープロダクツ代表 通谷 章



安倍晋三元首相が襲撃された。衝撃的なニュースだった。実行犯は山上徹也という四十一歳の男。十代の頃より、母親が入信した旧統一教会に多額な寄付を繰り返したため、家庭崩壊に繋がった恨みが募り、銃弾の矛先を変えて狙ったものだった。

このニュースに接したとき、私の頭に真っ先に浮かんだものは、オウム真理教の教祖・浅原彰晃に対する裁判開始時の光景だった。審理を進めるため、入廷してきた浅原の恰好は例のオウム服、いわゆる宗教服だった。それを見咎めたのが検察側である。「裁きを受ける人間の服装としては相応しくない。着替えさせるべきだ」との指摘を行い、裁判官は疑問を抱かずに要求を受け入れた。なぜ、裁判官は当然のように浅原の着衣を変更させたのであろうか。

現行の法律は、被告人が法廷に立つ際の着衣に対して規定をしていない。ということは、オウム服の浅原を着替えさせる必然はなく、検察の越権行為を撥ねつけることもできた筈であった。にもかかわらずである。

これは、裁判官が世間の空気を読んだためである。浅原はあれだけの罪を犯した宗教団体の張本人である。人権を配慮した扱いをする必要はない。それが世間の風潮だった。それを検察に指摘された裁判官が嗅ぎ取ったためである。

当時、オウム真理教が犯してきた犯罪の数々は驚愕するものだった。最大の事件は地下鉄でのサリンのばら撒き。多数の死傷者を出したことは記憶から消え去らない。水面下で活動していた宗教団体の暗躍は、犯罪が露呈した時点であらゆる角度から広く国民に報道された。報道に接した国民の大多数は、邪教に対する怒りをあらわにし、かつ非難轟轟の潮流に乗っかった。何をもってしても、許さじの姿勢である。

法廷では罪状認否の確認をまずもって前提にする。服装うんぬんは審理に考慮されるものではない。だが、世間の空気を読んだ裁判官は、逆らうことは得策ではないと考えた。これが先の場面である。

思えば大した事ではない。審理に大きな影響を与えるほどでもない。だが、法を最大限に遵守せねばならない立場の者が、被告人に不利な状況を並べてくる検察の意見を受け入れたことが問題なのである。

よく、法治国家という言葉が出る。日本の法体系を表している。提訴すれば三審制度、地裁→高裁→最高裁と順次厳正な裁判を経て判決に至るという絶対感である。少々の問題が起こっても「日本は法治国家だから、法がきちんと裁いてくれる」、いわば、法の番人に対する信頼感である。だが、本当にそうなのだろうか。

最高裁の判事の任命はときの内閣によってなされる。信任については国民投票による○×が担保されているが、普段、接することのない裁判官に賛否はつけがたい。実質、どういう人物が最高裁を形づくっているのか、余程の人間でない限り、関心の対象にならない。

国を相手どった裁判が時折見受けられる。かつて頻発した公害訴訟に始まって、冤罪訴訟、一票の格差、不当就労、訴訟内容は色々だが、最高裁まで持ち込まれて原告側が勝訴するのは稀である。最高裁は、高裁で下された判決手順に瑕疵がないかを審議することに重きが置かれている。つぶさに提訴内容を吟味するわけではない。ゆえに、高裁で出された判決が覆ることは殆どない。また、最高裁の判事を任命する内閣に盾突く判決を出すことは雇い主に逆らう行為、身内に矢をする行いと、保身めいた気持ちが働くと考えるのは穿ち過ぎだろうか。

法治国家という言葉を見つめた際、ときに私の心は揺れ動く。法治国家としての根底は、司法、立法、行政の独立であり、幼い時分の教科書で散々習ってきた。しかし、明確に三権が独立しているかという点に怪しい。最高裁判事の任命がそれであり、政治家の多くは、選良に選ばれたにしては官僚が用意した原稿をたどたどしく読み続けている。日本が優秀な官僚によって動かされているのは、今更のこと。三者それぞれに弱点を補い、三すくみといってもいいかも知れない。日本は法治国家というより、官僚統治国家というのがすっきりする。

今回の襲撃事件は、純然たる刑事事件である。標的にされたのが元首相であるが、刑事事件であることは動かし難い。犯罪の素因に宗教があったとしても宗教事件ではない。刑事事件と宗教事件を混同してはならない。

だが、一国の元首相の暗殺事件だけに、世間の空気はある一定の方向に流れ出している。SPや警護警察の追跡は当然であろう。気がかりは犯罪の重要性よりも元凶と見なされた宗教に問題の比重が移りつつあること。実際、刑事事件と宗教事件の境目が判然としない報道が大勢を占めつつもある。

原因を追究しても、事件と内在化した原因を一緒くたに見なしてはならない。かつて、司法の場で刑事事件と宗教事件をないまぜにして審理を進めてきた先例が多いのが懸念されてならない。

今回の事件で得られた教訓を探し出すとしたら、つい雪崩現象を起こしがちな一億二千万人の国民が、事件の性格と法の解釈に対して明確な区分を持っているかどうか、光の乏しい袋小路に入らない心構えを持つ国民なのかどうか。一人一人の思考程度が試されている気がしてならない。

(7月19日記)

ひろしまのまちづくりの動き

① 広島市、中央図書館等の移転の検討業務発注！

中央図書館等の広島駅前の商業施設（エールエールA館）への移転計画は2022年度当初予算で成立したが、広島市議会は付帯決議を採択。その内容は、①関係者から広く意見を聞いた上で図書館整備方針を作成すること、②現地建て替え、中央公園内等での移転、エールエールA館への移転の3ケースを比較検討し、関係者の理解のもとに決定すること、③基本設計・実施設計の各段階においても、関係者の意見を広く取り入れること、以上の三点である。



中央図書館北側正面

②の要望に応えるため、広島市はエールエールA館への移転検討業務を原設計者の安井建築設計事務所に特命随契で委託し、3ケースの比較検討業務は一般競争入札で東畑建築事務所に発注。両事務所とも実力があり、客観的に公正な検討を望みたい。万が一、市の要望に沿うような結論を出したなら、設計界から総スカンを食うことになるだろう。

①については、市が図書館の再整備方針の素案を作り、有識者の図書館協議会でも議論されたが、これまでの検討成果を踏まえておらず、唐突に出された素案に対する戸惑いと不満が噴出していった。平和記念都市或いは国際平和文化都市広島として誇らしい中央図書館のビジョンが求められる。市民からも意見を募集し、9月にはその結果を公表する予定。

ところで、都市公園法に基づく建蔽率（敷地面積に対する建築面積の比）上限の問題はどうなっているのだろうか？広島城三の丸に歴史館を建てる計画や公園内にパークPFI方式で飲食・物販施設等をあちこちに整備しているが、今のままでは法律違反となる。中央図書館等の解体撤去を前提としているとすれば、3ケースの比較検討は何のために行うのだろうか。

中央公園を所掌するのは公園整備課のはずだが、各施設の担当課がバラバラで実施しており、全体の整合性が取れていないのは組織的な欠陥があるからか。

付帯決議が誠実に実行されるか、市民は目をそらさず注視していかなければいけない。

② 第8回 響け！2代目平和の鐘祈念式 (実施報告)

- ◆ 日 時：令和4年8月6日（土）9:30～10:00
- ◆ 場 所：中央公園（2代目平和の鐘周辺）
- ◆ 主 催：響け！平和の鐘実行委員会

今年で第8回となる祈念式は、コロナ禍のなか感染拡大防止のため、昨年と同様に実行委員会メンバーが主体となり簡素化して実施した。また、旧市民球場跡地整備の事業地内であり、事業者の協力を得て入場した。曇天だが暑い日であった。



高東代表の挨拶で、来年こそは平和の鐘が打ち鳴らせるように訴えた。次に、被爆者への鎮魂と世界平和を願う黙祷に続き、「ひろしま平和の歌」を合唱。会員の松波さん、通谷さんの挨拶に続き、今回初めて参加された樹木医の堀口力さんから活動への励ましのスピーチで終了した。

閉会后、広島銅合金鑄造会会長の長男である松村伸吉さんが、鐘を鳴らせなかったのは非常に残念だという言葉が胸に沁みた。今後の広島市の取組に期待し、来年こそは平和の鐘の音が広島空に響くことを願っている。

(実行委員会 片平 靖)

○ 広島復興の軌跡・人物編 (第32回) 丹下健三氏と軸線 その4

～軸線は多様な働きをする、それぞれが思いを吹き込む壮大な仕掛けであり装置となっている～

昭和24(1949)年の平和記念公園コンペで入選した丹下健三グループ案の中心的コンセプトの一つが、資料館中央—原爆ドームを貫く軸線設定であったことはよく知られている。丹下はこの軸線にどのような思いを込めたのであろうか、その実現過程や様々な思いの交錯や付加された思い、今後の扱いをめぐる展望などを綴ってみよう。(以下敬称略)

1. コンペ当初案の発想とその受け止め

「広島平和記念公園(以下平和公園と略称)コンペティション」が同年8月6日に審査結果の入選案が発表され、丹下案について、8月7日付中国新聞では「公園の中央には平和記念碑というべきアーチの塔をつくり随所に緑樹が配されており、百々に観光客が立てば記念館の廊下、アーチの塔をすかしてアトムの残骸旧産業奨励館のドーム¹⁾を見通し得ようになっている」と説明し、明確に軸線の存在を伝えている。

そもそも丹下案における意図はどのようなものであったのであろうか。コンペにおける審査では審査委員長格の岸田日出刀によれば「本案のすぐれた点は、その全体の配置計画が、周囲の都市計画的な諸要素とよく調和適応している点である。この種の団地の配置に当たっては、まずその軸をどうとるかが、基本的な問題の一つで極めて重要である。(中略)原子爆弾洗礼の記念的な残骸である元産業奨励館—一部にはこれを取り払うのをよしとする論もあるようだが、これは昭和20年8月6日の活きた記録としていつまでも後世に残し伝えるべきものである。これを強く主張したい—は本公園計画で極めて重要な要素の一つであることは、元安川を越したこの敷地の一小区域が公園区域内に計画されていることによっても知れよう。100米道路に面する敷地境界線の中心とこの元産業奨励館をつなぐと、それは100米道路と略直角をなす。この線を主軸として諸種の建築物や園内施設を配置計画したこと—一等案のまですで大きな特徴と長所がみられる。」と最大限の賛辞を贈っている。

当選した丹下案における軸線は図2のように、まず原爆ドームA点と後に資料館と名付けられる陳列館の中心点Bを結ぶのであるが、これが後に慰霊碑に置き換えられる平和アーチとその地上での交差する地点Cとするとき、ABCの軸線が浮かぶ。そしてBの両側にDEを取り100米道路方向からAに向けて2本の線が引けばそこに台形ができる。併せてAB上にJ点を取りそこから元安橋西詰と相生橋南詰に向けた線を引くとき、慰霊碑を挟んだ反対側にやや変形した逆台形ができる。

ここで当初案において抽出される主軸線Iと、同時にII、III、IV、Vの側軸線が抽出される。これらの軸線はいずれも人々を平和公園に導き、公園内で主要な動きを支える導線・動線であり、例えば相生橋から慰霊碑へのV、元安橋から慰霊碑へのIVというように考えられており、これらの軸線は公園を形成する区画線、例えば平和広場など区画する線となっている。

ここで重要なのは、主軸線というだけでなく側軸線の存在であり、同時に軸線によって平和広場と呼ばれる台形を形成しようとする点である。とりわけこの台形がル・コルビュジェから学んだ丹下案の神髄であることを藤森照信が指摘しており²⁾、建築関係者でも側軸線による台形の形成に気付いている人は少なく、主軸線の存在のみを強調しているのが現状である。

2. 丹下の意図と実施設計時の丹下の決断

丹下はなぜこのような軸線や台形の採用を進めて平和公園全体を構成しようとしたのであろうか。実は丹下によると後に展開された理論として、都市設計には機能的段階、構造的段階、さらには象徴的段階があるというのである。詳しくは言及できないが、都市を構成しようとする時、とにかく必要な機能を備え、必要な施設を整え、都市問題に対応し、将来に備えようという機能

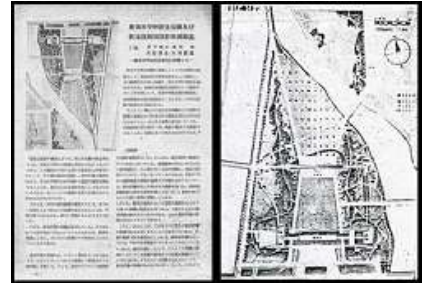


図1 コンペ結果を報ずる建築雑誌(1949年10.11月合併号)、天地逆表現した配置図

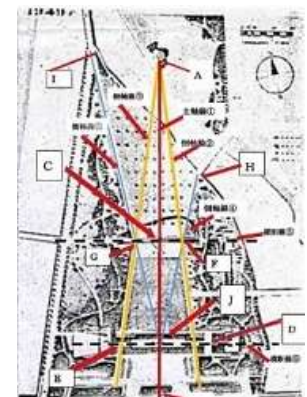


図2 コンペ案から抽出できる軸線(主軸線・側軸線)



図3 現況市街地図による軸線(主軸線、側軸線)の抽出

的都市の段階から、都市に新たな構造を与えてそれに向けて形成していくという構造的段階、さらには機能や構造を超えて象徴的に構成する段階があるという。

かつての中世期の周囲を城壁で囲んだ団子のような都市形成から、オーストラリア首都のキャンベラとかアメリカの首都ワシントンなど、単純なグリッドパターンでなく斜線や大通りなどが交錯し、広場やオベリスク等ビスタポイントが配置されるといった、都市全体が明確な形態を有する構造的段階の都市、さらには都市設計の究極の段階として、都市をイメージしやすく何かを記念するような都市があるともいっている。これらの都市の優劣を主張しているのではないが、都市設計の発展段階に対応した理論と事例を述べたのである。

丹下が平和公園で面倒な操作をしてまで軸線で都市形成を図ろうとしたのは、単に建物を並べ、人が集まり、そこで必要な活動ができるといった機能的なレベルの実現でなく、そこに平和公園で言えば精神性・記念性ともいべきレベルの実現を提示しようとしたのではないか。

ところで、コンペ入選発表の段階から、平和公園建設の予算が認められ、1950年から実施設計が進められることとなった。ここで紆余曲折的な様々な動きが繰り返されるが、最終的に当初陳列館と呼ばれた資料館と記念館本館の設計と、公園全体の配置図が作成された。ここで変更された実施計画の配置図を入手して掲げることはできないが、実施された結果をみるためには現在の市街地図をみればよい。これによれば側軸線の位置や台形の形等がかなり変更されている。

その詳細は別途譲るとして、最も注目すべきは、元安橋西詰から慰霊碑への側軸線の起点を大幅に南に押下げたため、その存在感が失われていることである。すなわち元安橋を超えてすぐ左折して慰霊碑に近づこうという人は少なくなり、そのまま少し進んでから左折する動きを誘発することになったのである。ここで気付くべきは現在の広島市レストハウスの存在である。コンペの時、丹下案では解体を予定していた建物の存在である。ここはその後、東部復興事務所となるのであるが、まさに復興事業の中心的存在として機能した。このことを実施設計時に、丹下は無視することができず、あるいは強く説得されて、解体を思いとどまったということの意味する。

丹下が当初の思いを断念して別の選択に進むことは稀であろう。しかし広島ではそれが現実化したのであり、結果として現在のレストハウスが存続することに繋がった。このことに気付いているのは市民だけでなく建築都市関係者も少ないのであるが、丹下を語るにはこのレストハウス、いや旧大正屋呉服店、旧燃料会館からの存在、存続の物語に是非とも触れていただきたいものである。

3. 軸線はどのように機能するか、意味するか

今まで丹下の軸線といわれる主軸線について様々言及されてきた。確かに歴史的に軸線はバロック都市などにおいて王や皇帝などの権威の象徴として導入され機能してきた。ナポレオンⅢ世がパリ大改造においてルーブル宮と新設するオペラ座とを旧来の市街地形態を無視するように結び、軸線を通して直結したのはまさにバロック都市形成の象徴的な方法であった。

有名な丹下による大東亜共栄圏に関わる設計コンペにおいて、富士山を遠望して象徴的な軸線が提示されているのも国家的な威信に関わる提示であろう。丹下に強権的な意図がなかったにしても、軸線採用がこれによって国家の威信を高め国民の統合に寄与することは当然意図したところであろう。今もって丹下の軸線から敷衍してこのコンペのことに触れ、丹下の体質に言及しようとする都市・建築の評論・解説が多い。

一方、神社や寺院など宗教的施設や都市の周囲との地形との軸線が意図的に構成された場合もあり、これは権威というよりはより象徴的な意図による記念性ともいべき都市形成手法であろう。このレベルで丹下の軸線を取らえていたのは鈴木博之であるが、詳細は省くこととする。

ここでは丹下の生涯を通して国との関りとか、体質とかに触れようとするものでなく、平和公園から発した軸線が細部に至る側軸線と合わせて、構造的な公園の構成を目指し、公園への集中と公園内の移動を担保しようとしたと主張したい。

その良否の評価は別として、広島市街地での平和大通りと北の相生橋、そして東西の元安橋、本川橋に限られた空間において、人の動きを把握し、平和公園に導入し公園を成立させようとした軸線である。主軸線は付与された記念性が強く浮かぶとしても、それだけを権威的に強調したり、押し付け的に利用したりするのではなく、軸線全体を平和記念都市としての記念性の象徴として、受け入れるのがよいと思われる。

この歴史の解釈は、関心のある市民・関係者によって継承されるべきであろう。さらに、この軸線の提唱が、その後原爆ドーム保存に及ぼした影響については別途考察する必要がある。

(編集委員 石丸紀興)

脚注

- 1) 昭和 24 年当時原爆ドームという表現は定着しておらず、残骸旧産業奨励館のドームとしていたことに注目される。
- 2) 現在でも、広島国際大学や広島大学の非常勤講師における平和教育の一環で、学生にこの平和記念公園に軸線が存在していたこと知っていたか質問すると、やはり 20 年前ごろはほとんど認識されていなかったが、次第に中国新聞などの報道も影響して高まり、最近では講義時で約 50%に達してきた。それでも知らなかったという回答もそれなりに多いのが現状といえよう。これが専門外の、建築都市関係でない人の一般的な受け止めであろう。

参考文献

- 1) 建築雑誌 (1949 年 10.11 月合併号)
- 2) 1949 年 8 月 7 日付中国新聞「四萬坪に文化の粹 (広島平和公園・当選作決る)」
- 3) 石丸紀興著：広島平和記念公園コンペにおいて入選した丹下健三グループ案の軸線構成とその意味に関する研究—コンペ入選当初案における軸線構成とその後の変更の意味 (日本建築学会中国支部研究報告集第 38 巻、平成 27 年 3 月) pp. 921-924

□ ほっとコーナー

息子はダウン症ダンサー

福祉事業所勤務 佐藤千恵

私にはダウン症をもつ 25 才の息子、TATSUYA(たつや) がいます。現在、南区にある多機能型事業所 LOVEART という就労継続支援 B 型事業所に通い、そこで 6 年前からダンスレッスンを本格的に受け、パフォーマンスをしています。日本全国をみても珍しい、ダウン症者 6 名で構成された、I4P(アイフォーピー)というチームのメンバーです。

25 年前、TATSUYA (敢えてダンサーネームで書かせていただきます。)が生まれてすぐにダウン症があるとわかったときの衝撃と落胆はものすごいものでしたが、彼の生まれつきの愛嬌と運の良さ、私たち家族のそれなりの努力でいつの間にか TATSUYA が家族や周りの人との関係をうまく結びつけてくれ、人生をより豊かにしてくれました。

そして生まれた時、小さかった時には想像すらできなかった、想像をはるかに越えた現在の生活があります。TATSUYA はじめ I4P メンバーのパフォーマンスはイキイキと楽しそうで、個性的な魅力を持ち、観る人を感動させてくれます。

障がい者は好きなことを見つけたり、トライする機会になかなか恵まれない中、TATSUYA たちは運良く、タイミング良く、それを手に入れ、毎日レッスンを続け、障がいがあってもこんなにできるのか! ?というくらいの素敵なパフォーマンスをみせてくれるようになっていきます。

ここまでくるには指導してくださっている現役ダンサーの先生方が「まだ出来る! もっと! もっと!」と、情熱を持って技術を惜しまずに彼らに与えてくださっているからだ実感しています。好きなことができたならとあえずその機会を手にいれる、やってみる、とにかく信じて続ける、限界を決めつけない、、、可能性は無限大です。

今、チームの名前も世間に少しずつ知られるようになり、色々なイベントからお誘いを受けるようになっていきます。いつか彼らのパフォーマンスを観ていただくと嬉しいです。(HP、Instagram、Facebook で I4P 広島、I4P などで検索していただくとヒットします。フォローもよろしくお願いたします!)

イベントへの出演依頼も受付中です。

応援よろしくお願いたします!



○ 「Hihukusho ラジオ (第48回) 2022.6.15 (*リンク参照)」 報告

2020年6月より月2回、1時間程度、旧陸軍被服支廠を題材としたラジオ番組「[Hihukusho ラジオ](#) (*リンク参照)」がインターネット配信。これまで被服支廠の保存の動きに関わりのある人たちが登場している。今号は第48回目の前岡智之氏の発言の要点を紹介する。

ナビゲーター：土屋時子 (広島文学資料保存の会代表)

ゲスト：前岡智之 (メルマガ「まちづくりひろしま」発行人)

インタビュアー：瀬戸麻由 (シンガーソングライター)



—生い立ちなど—

両親が広島出身で父方の実家は戦前広島駅近くの京橋町で和菓子屋を、母方の実家は時計店だったので、私は商人の息子だった。両親は戦後上京し、1947年に自分は誕生したが、7歳の頃広島に戻り、広島駅前に住む。当時駅前は闇市で、大火で段原に引っ越し、段原中学校、皆実高校に進む。

高校ではバレーボールに熱中し、隣の県立工業高校とよく練習試合をした。そのバレーコートが被服支廠倉庫に隣接していたが、トラックがよく出入りする大きな倉庫があるなどという程度の認識しかなかった。ただその頃(昭和40年)は倉庫の周りは田畑で、住宅がポツンポツンと建っている程度だった。

—都市計画及び建築のコンサルタント代表になるまで—

大学でもバレーボールに明け暮れ、大学院に進んで初めて勉強をやる気になった。都市計画を専攻し、研究室にある専門書を読み漁っていた。

校内の掲示板を見ていた時に偶然呼びかけられた広島の建築家の門をたたく。その人は広島湾をせき止めて淡水化するとか、空港までモノレールで結ぶとか、大きなスケールで広島のみちづくりを提案していた。

1972年4月に入社して2か月目に、設計事務所協会に出向して広島駅前の再開発案作りに参画するよう命じられ、各事務所から集まった若手10名の人たちと取り組む。7月にはその成果を当時の山田市長に説明し、激励され、県美展にもパネル等を展示した。

ちょうど広島駅前地区の将来ビジョン策定業務が市から発注され、当時のやり方として東京の大手コンサルが受注したが、山田市長の意向もあり、大手コンサルの出先として中国セントラルコンサルタントがその年の12月に誕生。その代表となって50年、現在に至る。

—中央公園の将来ビジョンを問うアイデアコンペを実施—

学生時代の親友と組んで2011年にアイデアコンペを実施。行政に頼らず、自分たちの力で賞金、募集要項、審査の仕組みなどを検討。応募者は世界から求め、市民の投票で審査し、賞金の足しにするため投票者には千円の協賛金をお願いする。有識者による特別審査員を設け、審査の公平性を保つこととした。

結果、72点の応募があり、300名程度の投票参加者により審査がなされ、無事終える。提案されたなかには今でも通用するものが沢山ある。

(なぜ行政に頼らず実施したのか?) →行政の役割はまちづくりの事務局であり、実施するのは私たち、市民であるという意識があった。

投票者は千人を超えるものと思ったが、叶わず、市民の関心が低いことを思い知る。当時、湯崎知事の講演の後、まちづくりへの市民の関心を高める方法を尋ねると、「意識の高い人を一人一人積み上げていくしかない」との回答を得る。このことをきっかけに親友と相談して2012年からメルマガを始める。

—メルマガ「まちづくりひろしま」—

アイデアコンペの特別審査員や協力者に声をかけ、メルマガの編集委員に参加してもらう。編集委員がそれぞれテーマをもって取り組んでおり、執筆の方も自主的に書いてもらえる。

戦後の復興、街並み、中央公園の提案などのシリーズやまちづくりのトピックスをメインに据えて、その時々ニーズに応じたテーマについて巻頭言を依頼しているが、快く引き受けてもらっている。みんなボランティアであり、損得でやっていないからではないか。

今号で61号、丸10年が経つが、若い人たちが後を継いでくれれば、100号・200号と続けることができるのではないか。

(メルマガの副題が「被爆100年後の姿を目指して」とあるが、その趣旨は?) →目先の問題に目を奪われがちだが、数十年先のビジョンを掲げて、それを実現するために今何をなすべきかを考えることが重要であり、その視点を大事にしていきたい。

―復興に燃えた頃は熱かった―

戦後の広島には一日も早く平和な都市として立派に復興したいという目標が語られていたが、今の人はそのことを知らない。河川沿いのバラックを撤去して緑地にしたり、大きな道路を作ったり、国有地の払い下げを受けて広い公園や学校にしたり、平和大通りには全国から送られた供木を植えたり、国内外からもいろいろな支援を受けてきた。

旧市民球場の建設も地元財界からの資金援助があり、着の身着のまま生活していた市民もたる募金で支え、カーブと市民は寄り添い、みんなで復興を果たそうとする熱意があった。

そのバックボーンとして1949年に制定された広島平和記念都市建設法がある。この法律を草案した寺光忠氏は広島都市像を「一たび広島市に踏み込めば、その一木一草が恒久の平和を象徴して立っている」という風に評している。

広島は世界中からいただいた援助により復興したのだから、これからはその恩返しをしていかなければならない。その気持ちが底辺になれば、広島のみちは目標を見失ってしまう。

(底辺の気持ちとは?) →例えば、紛争国から広島に来た人が日頃の苦しさや悲しさを忘れさせてくれるホスピタリティの心を持ったまちである。それは他の都市と競争して高層化するとか、コンパクトにするとか、活性化するとかではなく、広島の人たちの心持ちである。

中央公園のそばの川辺で子供たちが楽しそうに遊び、その近くで音楽好きな仲間が集まって奏でている、そんな光景があちらこちらにあればよいのではないか。

―被服支廠の保存・活用の検討の前に―

保存活用策をいろいろな人が提案しているが、その前にこんな風なまちにしたいというビジョンが明確に位置付けられていない。そのビジョンをみんなで共有した上で議論しなければまとまらないのではないか。

上海や北京にある都市計画博物館には、そのまちの模型があって、その中央にCG(コンピューター・グラフィック)ブースがあり、その中に入ってゴーグルをつけると将来像が見える。その都市の過去・現在・将来を視覚化することは意義あることではないか。被服支廠でなくても、どこかにそのような博物館ができればよいと思う。

地区ごとにそこに住む人たちが将来の目標を話し合っ、その全体の取りまとめを行政が担えばよいのではないか。

コメント

長年、広島に足を付けて取り組んできた広島のみちづくりに対する自負と熱い思いが伝わってくる。後に続く人が出てきて欲しい。(編集委員 瀧口信二)

○「時代を語り建築を語る会(第33回)」の報告

語り人：宮崎園子氏(フリーランス記者)

テーマ：広島の言論空間の内と外

～報道機関の実態とジャーナリストの生き方～

昨年、朝日新聞社を退職しフリーランス記者となった立場で、広島のみちのマスコミ業界の状況・課題等の話やこれからの展望を聞く。

主催：時代を語り建築を語る会実行委員会(代表：石丸紀興)

日時：2022年6月25日(土)14:30~16:30

場所：合人社ウェンディひと・まちプラザ

☆ 新聞記者になるまで

両親が広島県出身で、里帰り出産による広島県生まれだが、県外で育つ。中学校まで香港で、高校はアメリカで過ごす。大学を卒業してマスメディアに就職しようとしたが叶わず、金融機関に入社。朝日新聞社の中途採用の話聞き、応募して2002年に入社。初任地は神戸。

☆ 広島勤務

3年間の神戸勤務の後、希望して広島へ。被爆者取材ができると思ってきたが、事件担当に。



略歴：1977年広島県生まれ。慶応大卒。海外での生活体験、金融機関勤務を経て2002年朝日新聞社入社、2021年7月まで朝日新聞記者、2005-2007及び2017-2021に広島総局所属勤務

警察署取材や夜回りが多く、取材相手も年配者が多いので、マイノリティの女性記者の悲哀を味わう。記憶に残るのは2005年のあいりちゃん事件で、小学1年生の女の子がペルー人に11月22日に殺された。当時、全国で同じような事件が起きており、広島市は事件が起きた22日を「子ども安全の日」と命名。

2年間の広島勤務後、大阪本社社会部に配属。2017年から2度目の広島勤務。昨年7月退社。

☆ 広島印象

記者としては、広島は原爆関連だけでなく、国際面、社会面、文化面、スポーツ面、地域面等幅広い面に記事を書く機会があり、広島の土壌に育まれてステップアップする人が多い。

広島は男社会の保守的なまちであるように感じる。議論も少なく、「役所に任せておけば悪いことはしないだろう」という「お任せ民主主義」がはびこっているのではないかな。

外から社会面の広島の記事を読んでいると、広島の人にはノーモア・ヒロシマで一丸となって訴えているように見えるが、広島に住むとそうではないと感じる。ウイーンでの核兵器禁止条約の第1回締約国会議の話もママ友の間では無関心だし、いわゆる平和運動の内外で、何かにつけギャップを感じる人が多い。広島の内なる隔たりを認識し、乗り越えていくことが大事。そのためにもっと活発な議論のあるまちになってほしい。

8月6日の首相の平和宣言は、核兵器のない世界、唯一の戦争被爆国、世界恒久平和の実現が必ず含まれる三大文言だが、核兵器禁止条約がリトマス試験紙となり、やっていることと言っていることの食い違いがはっきりした。

☆ 平和を因数分解

広島の平和＝核兵器廃絶に矮小化されることが多いが、平和は幅広い分野に関わるものであり、平和と雇用、平和と都市政策、平和と女性の権利、平和と子供の問題等、因数分解して考えるべきではないだろうか。ジェンダー（社会的性差）不平等な世界は、自分にとっては平和ではない。

☆ マスコミとSNSとの関係

自分が入社したころは、ツイッター等のソーシャルメディアはなかった。今は誰でも自由に何でも情報発信できるし、SNSから多くの情報や視点を入手できる。SNS全盛の今、マスコミの役割は権力者が自らSNSでは発信しないようなことを報じること、SNSでは発信されない声なき声を吸い上げるのではないだろうか。シニアの人にはSNSの活用を勧め、逆に若い人には新聞を勧めている。

新聞は紙面の都合上コンパクトにまとめなければいけないし、ニュース性を事の大小で判断するので、社会面から漏れたものが地域面に回る。地域面とは本来そういうものではなく、その地域に暮らす人の目線での地域への問題提起があるものだと思う。自分は地域に根ざして暮らす一生活者として記事を書きたいので退社した。

☆ 新聞社退社後の取り組み

コロナを経験してどこにいても仕事ができることが判明。広島にいながらも東京からの仕事ができる。逆に広島にいるということがアドバンテージ（優位）だと感じることも多い。

広島に根を下ろすと全国紙の新聞記者とは違った見え方がある。これからは平和を願う一市民として、遠くの人に広島を届けると共に、地域の課題について議論しつつ、後世に記録として残せるような執筆活動もしていきたい。虫の目と鳥の目を持って取材し、どっぷり広島につかるのではなく、いい意味で「よそ者」の目を持っていたい。

この度、本『[「個」のひろしま 被爆者 岡田恵美子の生涯](#)』（*リンク参照）を出版した。

☆ 質疑応答

・海外の人は広島をどの程度知っているか？ウクライナの被害調査を広島から応援に行きたいがどうしたらよいか？→ヒロシマの名前を知っている程度で実はよく知らない。高校の時、広島出身と知った先生から授業時間を与えるから広島の話をしてくれと頼まれた。祖母に国際電話して被爆体験を聞き、みんなに紹介したら、よくシェアしてくれたと喜ばれた。

何か新しいことをやりたいなら、SNSで積極的に情報を発信して仲間を増やしていくことだ。

・自分の考えではなく、他人の主張を借りて報道している人が多いのでは？→「言わせる」ジャーナリズムと呼んでいるが、報道の中立・客観性にかこつけて自分に批判が向かないように当事者になることを避けている。それは傍観者報道であり、思考停止ではないだろうか。記者

も市民社会の一員なのだから、少なくとも権力と市民との関係においては、明確に市民の側に立って問題提起をするジャーナリズムへ転換するべきではと思う。

・聞く力とは？→政治家の場合は、市民の声ではなく支持者が多い。岸田首相が核兵器廃絶をライフワークと言うならば、原爆で亡くなった人たちの声なき声こそ聞いてほしい。

コメント

ジャーナリストの実態の一端を垣間見ることができた。大手新聞社を辞めて地域に根差した情報を発信したいとの思いはこのメルマガに通じるものを感じた。(編集委員 瀧口信二)

○ 「どうする『わたしたちの』図書館、勝手に検討フェスティバル」報告 (概要)

広島市の図書館再整備方針(素案)に対する意見募集が8月25日に迫り、PRを込めて急きょ検討フェスティバルを実施したという。

日時: 2022年8月21日(日) 10:00~20:00

会場: port.cloud(広島商工会議所9F)/オンライン配信

主催: ひろしまのシビックプライド(市民力)を考える会

後援: 広島市/広島市教育委員会

主催者「ひろしまのシビックプライドを考える会」は、ブックカフェ「ハチドリ舎」で5月に開かれた「ひろしま未来カルチャー会議」で、テーマ「どうする!?わたしたちの図書館!」を議論したのがスタート。メンバーはカフェ店主や会社代表、NPO法人代表理事、作家、記者など、広島のまちづくりの現状をなんとか打破したいと願う人たち。

『自分たちがほしいまちの未来は自分たちでつくる』をモットーに、そのためにはシテビジョン(行政・開発会社主導)とシビックプライド(当事者意識に基づく自負心)の両輪が必要で、官民共同作業が必須と考えている。

今回のトークイベントは広島市の後援を得て生涯学習課長や中央図書館長も参加。図書館移転に反対するだけでなく、市と共により良い方向を目指して行こうというスタンス。10時間にも及ぶイベントをユーチューブで生配信しながらアーカイブとして残し、今後ホームページも開設し、継続的に活動するという。

トークイベントの内容

- ・あこがれの図書館として、フィンランドのヘルシンキ中央図書館 Oodi、ぎふメディアコスモス、群馬「太田市美術館・図書館」の3館の事例紹介。
- ・ゲストトークとして、町のコミュニティの中心となる存在感を高める図書館活動をした福岡県にある町立図書館の元館長の経験談や神奈川県立図書館の廃止の危機を乗り越えた図書館アドバイザーの苦労話、広島市中央図書館長による中央図書館の紹介など。
- ・対談トークとして、平岡敬元広島市長を迎え、主催者側2名と対談。国際平和文化都市広島における国際平和・平和文化の平和の重み、文化の重みについて市長の実績を振り返りながら語り合う。(次号で紹介予定)
- ・会場やZoom参加者、ユーチューブ視聴者からの質疑応答やコメントなどの紹介。

長時間ではあるが、多彩な人が登場し、主催者側の図書館再整備に対する熱意が伝わってくる。関心のある方は是非、[ユーチューブ動画](#)(*リンク参照)を視聴ください。

□ 特別寄稿 『原爆詩集』70年、広島「平和」の質を問う

— 峠三吉詩碑すぐ傍に建てられた「被爆遺構展示施設」に関して —

広島文学資料保存の会事務局長 池田正彦

今年、青木書店発行の峠三吉『原爆詩集』が誕生して70年になる。全国的に発売され普及したのは、この一冊である。

時代背景は、1950年6月朝鮮戦争勃発、アメリカ大統領トルーマンの「原爆使用も考慮」という声明に触発され、西条療養所近く、原演習場の砲弾の音を聞きながら書かれたと言われている。

峠は、日記(12月1日)に次のように記している。「原子爆弾を使用するかもしれぬとのト大



統領の声明が発表せられ、反対の動きが伝えられる。広島市民からも直ちに意志表示がなされるべきだと思う。」

現在、ロシアによるウクライナ侵略の中、核兵器使用の威嚇が現実的なものとなっている。日本政府は、被爆国と言いながら核兵器禁止条約には背を向けている。

『原爆詩集』は今なお古くなることなく、屹立と存在し人類へ警鐘を鳴らしつづけている。

平和公園の新しい被爆遺構展示施設を訪れて愕然とした。県外から来た友人は「これだけ？」と声をあげた。あの展示室の小さな範囲には、あきれてしまいました。あのような、お金をかけた箱ものなどは不要で、保存加工した遺構の上を、特殊ガラスで覆うなどの、よく欧州の遺跡でみられるような、リアルな展示が考えられなかったのかと。

これは友人の出す「通信」に掲載された文章（抄）である。私もまったく同感しながら、別の意味でびっくりした。なんと「峠三吉詩碑」のすぐ傍に建てられ「詩碑」は大変見え難くなっている。ある人は「詩碑を探したがわからなかった」「これで碑前祭などの行事は無理だろうな」と言い、どうしてあの位置なのだろうかなど、疑義が出ている。



左側の小さな詩碑と展示施設

この詩碑は、峠三吉没後10年（1963年）に建立された。記録を含め手紙・出納帳が綴じられ保存されている。映画監督・新藤兼人氏をはじめ多くの文化・知識人・市民からの志金が集められ結実したことがわかる。開いてみると当時の息吹が伝わってくる。そんな感慨に浸りながら、この詩碑の前に立った。そして涙が出てきた。



峠三吉詩碑

『原爆詩集』の〈序〉で知られる「ちちをかえせ ははをかえせ」が刻まれている。この詩は、あの原爆投下による残虐、悲しみ、怒りを内包し、「忘却とあきらめを、めざめの方向へ引き出す歌として十分に訴える力を感じる」（詩人・壺井繁治「峠追悼集・風のように炎のように」）と書かれた。しかも詩全体をひらがなにすることによりメルヘン的な性格を帯び、簡潔で力強いものとなった。

峠三吉と併走し、詩碑を設計・デザインした四國五郎氏からは、「碑は、峠三吉が暮らした昭和町の平和アパートに向け、シンプルなモニュメントに心がけた」と、誇らしげに語られる姿を何度も拝見した。

修学旅行の生徒は必ず立ち寄る場所でもあり、景観には最も配慮すべきである。意志を込めて志金に応じた全国の方々、戦後の混乱期に峠三吉を中心に集結し、「反戦・平和」を口にするだけで犯罪視されながら一途に邁進した若者たちの記念碑でもある。さらに、この「詩碑」は、いわば四國五郎氏の一つの作品であり、この「展示施設」は内容はともあれ、こうした多くの人々を愚弄するモノと言わざるを得ない。

広島市長は、核兵器禁止条約締約国会議に出席し「核軍縮を進めその先にある核兵器廃絶しかない」と述べたと伝えられるが、私にはむなしく聞こえる。

所蔵している鈴木三重吉や原民喜、峠三吉などの文学資料をなおざりにした広島市立中央図書館の移転問題しかり、旧・陸軍輜重隊敷石の廃棄しかり、旧・陸軍被服支廠活用問題しかりで、足下の「平和」問題に関わる積極的施策はないに等しい。

同様に、広島の平和団体は、一部の人を除き、中央図書館移転問題においても、峠三吉「詩碑」にまつわる景観についても残念ながら無関心に近い。正直に言って広島は官民ともども液状化現象が深化している。

あのオバマジョリティで踊った人たちはどこに雲隠れしたのであろう。私たちは、この精算をまだ果たしていないにもかかわらず、街にはG7サミット大歓迎の垂れ幕が下がる。

伝説の報道写真家・福島菊次郎は、「広島は侵略戦争の過去を隠蔽するために、戦後日本が構築した虚構の都市だった」「ヒロシマの嘘」と看破した。（四國五郎も福島菊次郎もあの陸軍輜重隊で初年兵教育を受けた）

今、私たちは二人の生き方を噛みしめなければならない。

あの占領下、生命がけで「反核・反戦」の旗を掲げ闘った人たちの思いが詰まった「詩碑」の存在とともに。

（2022・6・23 沖縄慰霊の日）

○ 読者からの投稿

広島都市全体で平和記念都市を！

読者 保森博美

「まちづくりひろしま」を配信していただき、ありがとうございます。
毎回読ませていただき、広島の街づくりを考えさせられます。

「広島平和記念都市」の街が、平和公園と原爆ドームだけでなく、広島都市全体で平和記念都市に向け、計画してほしいと願っています。

被爆建物をいつまでも放置しておいては、劣化が進むだけだと思います。解体、延命改修又は再利用を本気で考えることが必要だと思います。

□ 編集後記

草野球をする機会もすっかりなくなった。公園を訪れてもあまり見ることがない。
キャッチボールは1人ではできない。ところが高校生時代、1人でキャッチボールをよくした。
仲間が居なかったのではなくお気に入りだったのだ。二・三人が並ぶこともあった。

大きな壁を相手にしたキャッチボールである。そこには「勤勉強行自由責任」と大きく書かれてあった。

被爆100年の広島の姿を目指すメルマガも10年を重ねてきた。沢山のボールを投げた。読者の皆さんに受け止めていただいていると確信している。

望むならばここから具体的な動きや議論が生まれ、まちづくりのアクションとなることを待っている。起こりつつあるまちの変化に対して黙って静観することをやめ、まず身近な人からでも話を始めてほしい。

(編集委員 前岡智之)

***メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて
皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！**

(投稿は500字程度でお願いします)

編集委員

| | |
|------|-------------------|
| 石丸紀興 | 広島諸事・地域再生研究所主宰 |
| 高東博視 | 響け！平和の鐘実行委員会代表 |
| 瀧口信二 | 広島アイデアコンペ実行委員会事務局 |
| 通谷 章 | ガリバープロダクツ代表 |
| 前岡智之 | 中国セントラルコンサルタント代表 |